

# とろろ葵・ねり屋安西嘉吉と和紙

「神奈川県農会報170号」に大正12年の農業関係の視察先として、和紙の糊材であるとろろ葵の扱い者中和田村下飯田の美濃口平司と和泉の安西嘉吉の名がある。



中和田村下飯田

ねり屋の名で知られる安西家は中和泉に現在も当時の風情をとどめている。嘉吉は安西孝夫氏の祖父で、明治30年頃安西嘉吉商店を設立した。現存する荷札には【各国产黄蜀葵】商とあり、鎌倉郡や高座郡・埼玉県の寄居や小川町の農家にとろろ葵の種を与えて栽培させる仕事をしてきた。和紙を作る時に必要なのは粘液を持った根で、9月頃に根を集めて荷馬車で戸塚駅へ運び、通運で静岡の製紙工場に出荷した。とろろ葵の栽培は、埼玉県の小川町辺りが主力で、孝夫氏は泉区歴史の会のシンポジウムの資料として和紙の里小川町で現物を探し、皆に見せて下さった。

和紙というと「ああ書道に使う紙か」と思われるかも知れない。

昭和30年頃までの暮らしを体験した人なら、木造で障子とふすま・カラカミで間仕切りをしていた日本の家・年末には家中の障子を貼り替えてその手伝いをさせられた人もいよう。コンクリートの住宅では想像もつかないが、紙や木は通気性がよくカビや結露、シックハウス症候群に悩む人もなく健康には良かった。

又契約や金銭の貸借など大切な文書は和紙に墨で書いた。和紙に書かれた文字はシミが付いてもクリーニングすればきれいになる。障子紙も雨風や太陽にさらされても1年以上は外気を遮断する役目を担ってきた。ナイロンなど無かった時代、和紙は生活に密接したものであった。小島貞雄氏によると昭和初期まで中田に古紙を回収して臼で叩いて再生和紙を作っていた会社があったという。昔の人は一つの物を最後まで工夫して使う習慣があった。とろろ葵は半紙、美濃紙、奉書、鳥の子、障子紙等の流し漉（すき）で、コウゾ・ミツマタなどの繊維を原料に和紙を作る時に根の粘液を糊材として使う。他に糊材としては糊ウツギの内皮を叩きつぶして水で抽出した粘液を使った。

## 和紙の製法とねり

緒切り→釜ゆで→皮むき→煮る→あく抜き  
→叩き→紙すき→乾燥→裁断→製品仕上げ

とろろ葵の根は、繊維を叩いて紙漉（すき）の前に使用する。



緒切り



釜ゆで



皮むき



煮る



あく抜き



○とろろあおい

ねりは栲やミツマタなどの長い繊維を十分にしかも均一に絡み合わせるために漉き物紙を漉くときに混入する紙粉紙である。



紙すき



乾燥

裁断



製品仕上げ

叩き  
根の皮をむき、も一度煮てあくを抜いたら臼などで叩いて漉かな繊維にする。これにとろろ葵の根から抽出した粘液を混入した紙粉紙を漉き上げて作る。

○とろろあおいは、アオイ科の1年草で中国が原産。高さ1メートル余で葉は長柄、掌状に深く裂け夏秋の頃に花は黄色で底は紅紫のオクラに似た大型の花が開く。花の散った後は楕円形の実を結ぶ。根の粘液は和紙の糊料。又胃腸炎、咽喉炎などの薬用にもなる。漢名 黄蜀葵